関連ページ『社会科 中学生の歴史』p.126〜127

描かれた農村風景

京都国立博物館　保存修理指導室長　**福士 雄也**

農民の暮らし

江戸時代、総人口の八割を超えていたとされる農民の暮らし振りを伝える古文書は、検地帳や御触書、宗門改帳など数多く残されている。また、当時栽培されていた農作物やその栽培技術などについては宮崎安貞『農業全書』（1697年）に詳しいし、農具のことは大蔵永常『農具便利論』（1822年）が委細を尽くす。あるいは、江戸時代に日本を訪れた外国人が著した書物、例えばケンペル『日本誌』（1727年）やオールコック『大君の都』（1863年）には、彼らが目にした農村のありさまが情感豊かにつづられている。これらの書物には挿図が収録されており、視覚的な情報を補うこともできる。

しかし、よりビジュアルな、江戸時代の農村風景というものに触れたいなら、久隅守景筆『四季耕作図屏風』（六曲一双）に勝る作品はないだろう。

一年の農作業

ここに描かれているのは、江戸時代の農村における稲作の様子である。季節ごとの農作業を、周囲の自然景の移り変わりとともに表現しており、全体を通してほぼ一年が巡る。

季節は、画面に向かって左から右へと進む。ここでは掲出していないが、左隻には、種籾の発芽を促すために水に浸す浸種（しんしゅ）、代（しろ）かき、そして田植えという、おおむね春から夏にかけての農作業の様子が描かれている。

一方、掲出した右隻の左三分の二ほどを占めるのは秋の稲刈りの作業である。鎌を使って稲を刈り取り、たばねて稲束を作っている。

稲束を馬の背に載せて運んだ先では、脱穀が行われている。この時代にはまだ千歯こきは考案されておらず、脱穀には唐竿が用いられることが多いが、ここでは長い柄の先に横棒をつけたT字型の塊割（くれわり）のような農具で叩いて脱穀しているようである。

その後方では、箕（み）を使い脱穀後の籾に交じった殻や塵を取り除く作業、土臼で籾をすり玄米にする作業、臼杵で玄米をついて白米にする作業が行われている。

画面右下に見える、精白された米を詰めて担がれた米俵は、これから蔵に運ばれていくのだろう。遠山は雪を冠しており、季節の推移と再び到来する春を暗示する表現となっている。

重い米俵を運ぶ作業など力仕事は主として男性が行っているが、田植えや脱穀、精米などには女性も一緒になって参加している。また、子どもたちも稲束を馬で運ぶなど、村の農民たちが一丸となって農作業に取り組んでいる様子がよく分かる。

誰が描いたのか？

この作品を描いたのは、久隅守景という画家。当時、画壇の頂点に君臨していた狩野探幽（1602～1674年）の高弟の一人であるにもかかわらず、伝記には不明な点が多く、生没年すら分かっていない。ただ、作品は数多く残されており、田園風俗を主題とした作品に魅力的なものが多い。とりわけ『四季耕作図屏風』には多くの需要があったらしく、現在十件ほどの作例が知られている。

描かれているのはどこの農村なのだろうか。守景は加賀（金沢）に滞在していた時期があり、当地の景観を描いたという見方もある。ただ、通常は画面の右から左に向かって季節が推移するように描かれるのに対し、本作ではそれが逆になっている。その理由も含め、諸説あるもののはっきりしたことは分かっていない。

勧戒（かんかい）画としての耕作図

そもそも、耕作図は単なる牧歌的な風俗画でも、現実の農村の写生画でもない。もともとは、農民の労苦を示し為政者の戒めとするために制作された絵画（勧戒画という）であり、徳による善政を重んじる儒教思想を背景としている。中国で描かれた耕織図（耕作と養蚕・機織りの作業を描いた図）を手本としているため、江戸時代の耕作図には中国風の人物が描かれるのが通例である。

その耕作図を、守景は日本の農村風景として描いた。だからといって勧戒画としての意味を失ったわけではないが、休憩して弁当を使う人々や、車座になって遊ぶ子どもの姿など、農作業と直接には関わらない描写も多い。当時の農村の暮らしを彷彿とさせる、そのいきいきとした人物表現は同時代風俗画としての要素も十分に備えており、そこに本作の独自性と魅力がある。

『四季耕作図屏風』（十七世紀、重要文化財、六曲一双のうち右隻）〈京都国立博物館所蔵〉